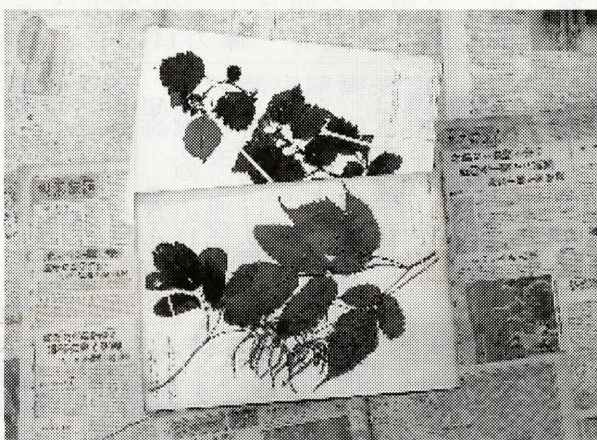


後世の必要なとき ヒトとモノつなぐ



札幌農学校第1期生採集の植物標本。それらを包んでいる新聞紙も歴史資料となる。北大総合博物館

博物館の標本庫から、果実の付いたコバノヒルムシロの標本が見つかった。採集地は札幌の藻岩山麓、採集されたのは1901(明治34)年。採集者は札幌農学校の植物学教室創始者で、藻岩山を開発から守ったことで知られる宮部金吾だった。つまり本種は、100年前に道内で発見されていたことがわかったのだ。

北海道大学総合博物館では、今日も膨大な未整理標本の整理が続けられている。札幌農学校以来、130年以上の歴史の中で集積されてきた途方もない数の学術資料群を、後世へ守り伝えていくためである。なぜ博物館は標本を集めるのか？ 標本はどう活用されるのか？ 小さな例だが、私がかかわった植物標本の事例を紹介する。

水生植物(水草)が、札幌市の男性によって採集された。それまで本種の分布域は宮城県が北限とされ、北海道での採集は初めてと考えられた。実は、本種と形態の酷似したホソバミズヒキモという水草が全国に分布しており、北海道でもよく見つかる。両種の決定的な違いは果実の形態にあり、果実の付いた状態で観察しなくては確実な同定はできないため、無果実の似た植物が見つかる、誰もがホソバミズヒキモであると考えてしまう。こうした事情もあって、コバノヒルムシロの確実な記録は北海道にはないとされてきた。

北の文化

0年、コバノヒルムシロとい

う水生植物(水草)が、札幌市の男性によって採集された。それまで本種の分布域は宮城県が北限とされ、北海道での採集は初めてと考えられた。実は、本種と形態の酷似したホソバミズヒキモという水草が全国に分布しており、北海道でもよく見つかる。両種の決定的な違いは果実の形態にあり、果実の付いた状態で観察しなくては確実な同定はできないため、無果実の似た植物が見つかる、誰もがホソバミズヒキモであると考えてしまう。こうした事情もあって、コバノヒルムシロの確実な記録は北海道にはないとされてきた。

100年前に採集された標本が見つかったことで、実は他にも道内での採集記録があるのではないかと考えた。そこでまず、文献調査と各地の博物館などの標本庫調査を実施した。その結果、美唄と函館にそれらしい文献記録があることがわかった。

次に、文献の裏付けとなる標本を調べた。美唄の標本は北大からすぐに見つかった。37年採集で、標本ラベルには「コバノヒルムシロ」と書かれているが、果実が欠けており、残念ながら確実な記録とは言えない。

一方、函館の標本は、市立函館博物館に収蔵されていた。当時の新聞紙に包まれたままの標本をひとつひとつ開いていくと、56年採集の「コバノヒルムシロ」と書かれた標本が出てきた。しかし、全く別の植物だった。誤って本種と記録されたもので、これを「誤同定」という。

以上の結果、北海道におけるコバノヒルムシロの確実な記録は、札幌と岩見沢の2カ所だけということになり、国内の分布北限は、宮城県から岩見沢へと北上した。

このように、植物の分布域を決めるためには、「見た」という記録だけでは不完全で、原則として証拠標本が必要だ。文献上の記録だけでは報告を検証することができない。標本さえ残っていれば、100年たっても再同定することが出来、その結果、函館の事例のように誤同定が判明することもある。

実物を確認することが一番必要とされることであり、「必要なとき」のために後世へ標本を守り伝えていくこと

が、博物館の最も重要な使命なのである。

博物館が集めるのは生物標本だけではない。土器、手紙、写真、機械、道具など様々なモノが託される。それらは、例えば生物標本だから理系の研究だけに使われるというの

ではなく、文系理系どんな分野にも活用される無限の可能性を持つ資料なのである。

目的が研究であれ教育であり、博物館にとって大切なことは、「ヒトとモノをつなぐ働き」であり、いつでもそれに対応できる「奉仕の体制」

を整えることだ。そのため、今日も博物館では昔からの標本を大切に整理し続けており、そこには、研究者とは異なる、ヒトとモノへの「奉仕者」としての学術資料専門職、つまり標本庫を守る職人が必要なのである。

北大総合博物館の開館10年を記念して、主に分類学の視点から様々な標本を一堂に集めた企画展「生物多様な部屋 北大の分類学の系譜」が1日から9月27日まで、同博物館で開かれている。入場無料。